

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：84604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K05716

研究課題名（和文）近世末期から近代に生じた日本庭園の意匠の地域性と現代への継承 出雲地方を中心に

研究課題名（英文）Regional characteristics of Japanese garden designs that arose from the late modern period to modern times and their inheritance to the present day - Focusing on the Izumo region

研究代表者

中島 義晴（NAKAJIMA, Yoshiharu）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・文化遺産部・室長

研究者番号：50321625

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：近世末期から近代にかけて日本のいくつかの地域において、地域独特の意匠をもつ庭園群がつけられた。本研究で主な対象とした出雲地方には、住宅などの座敷に面する平坦地を白砂敷きとして、短冊石という細長い長方形の切石や円形の石を飛石に用いて主景とする庭園が数多くあり、それらの意匠が現代も地域に深く根付いている。

このような特徴について研究した結果、先行研究で指摘されたように、気象条件や茶道の普及に起因して、飛石・手水鉢の形状・配置、燈籠の意匠・石材、樹木の仕立て方等に特徴があり、それが研究者や庭師・造園業者に地域性として認識されていることや、作庭書や地域の名園の影響がうかがわれる事例があることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、「出雲流」と呼ばれる庭園の特徴（構成・意匠・材料・使われ方）を他の地域の庭園と比較し、また作庭年代・経緯、作庭者等の考察をおこない、地域独特な庭園意匠の発生、普及・定着、およびその後の継承についての知見を得たことである。現地調査、文献調査、聞き取り調査等を組み合わせて多角的に検討したことには学術的意義があり、どのように地域に根付き現代にも継承されているかに着目したことには社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：From the end of the early modern period to modern times, garden groups with designs unique to the region were created in several regions of Japan. In the Izumo region, which was the main target of this research, there are many gardens where the flat land facing the tatami rooms of houses is paved with white sand, and the main scenery is made of strips of rectangular cut stones or round stones used as stepping stones. These designs remain deeply rooted in the region even today.

As a result of researching these characteristics, we found that, as pointed out in previous research, due to weather conditions and the spread of the tea ceremony, there have been changes in the shape and arrangement of stepping stones and chozubachi, the design and stone materials of lanterns, the way trees are arranged, etc. It turns out that there are distinctive characteristics that are recognized by researchers, gardeners, and landscapers as regional characteristics.

研究分野：造園学

キーワード：出雲地方 近世庭園 近代庭園 庭園の地域性 庭園文化の継承 飛石 書院 茶の湯

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近世末期から近代には、日本のいくつかの地域において、その地域独特の意匠をもつ庭園群がつくられたことが知られている。そのうち、代表的なものが出雲地方と津軽地方にある。本研究で主な対象とする出雲地方には、白砂敷きの広い平坦地に短冊石という細長い長方形の切石や円形の白石を飛石として用いる意匠を特徴とする庭園が数多くみられる。これらは、小口基実・戸田芳樹『出雲流庭園』(1975)において「出雲流」と名付けられ、37件の庭園の分布や特徴が発表された。その後は「出雲流」庭園を主対象として扱った研究は発表されていないが、近年はそれをもとに、鳥根県技術士会の会員が現況の確認や写真撮影等をおこなっている。筆者はこれまで調査されていない複数の旧家の庭園においても出雲流といわれる意匠がみられ、地域に深く根付いていることを確認した。

出雲地方の庭園は、特定の流派によるものではないという特異性があるが、津軽の大石武学流については、江戸の庭師が地方に移住し、その庭師と弟子らが独占的に作庭したものと説明されており、その形態の共通性について言及されることが多い(重森三玲『日本庭園史大系 第26巻』1976など)。津軽地方の庭園については、弘前市教育委員会が調査を実施している(青森県弘前市教育委員会編『大石武学流庭園群名勝調査報告書』2019)。

2. 研究の目的

本研究で主な対象とする出雲地方には、白砂敷きの広い平坦地に短冊石という細長い長方形の切石や円形の白石を飛石として用いる意匠を特徴とする庭園が数多くみられ、現代も地域に深く根付いている。本研究では「出雲流」がその発生、普及・定着の各段階において、どのようなものであったのかについて、また、地域に根付き現代にも継承された庭園文化として学術的にどのように評価できるのかについて、明らかにする。

3. 研究の方法

出雲地方とその周辺の庭園の現地調査、作庭に関連する人物や作庭書・名所図会などの文献調査、庭石業者・庭師などへの聞き取り調査、津軽地方などの庭園に関する調査を組み合わせる多角的に検討をおこなう。

個々の庭園の現地調査、作庭に関連する人物の研究、作庭書・名所図会の研究、現代の作庭に関する調査、津軽地方などの庭園に関する調査をおこなう。

4. 研究成果

近世末期から近代にかけて日本のいくつかの地域において、地域独特の意匠をもつ庭園群がつくられた。本研究で主な対象とした出雲地方には、住宅などの座敷に面する平坦地を白砂敷きとして、短冊石という細長い長方形の切石や円形の石を飛石に用いて主景とする庭園が数多くあり、それらの意匠が現代も地域に深く根付いている。

このような特徴について研究した結果、先行研究で指摘されたように、気象条件や茶道の普及に起因して、飛石・手水鉢の形状・配置、燈籠の意匠・石材、樹木の仕立て方等に特徴があり、それが研究者や庭師・造園業者に地域性として認識されていることや、作庭書や地域の名園の影響がうかがわれる事例があることがわかった。

2018年度は主に短冊石が使われた庭園に関する情報収集・現地調査をおこなった。短冊石の使用について作庭書などを調べ、現存する庭園について、先行研究の情報を整理するとともに、それ以外の事例を庭園の図書や各種の調査記録から見つけ出した。現地調査は中国・四国・関西・北陸地方の30件以上の庭園を対象としておこなった。短冊石が使われた庭園に関する情報収集・現地調査をおこなった結果、全国的な分布の傾向や意匠の種類などについて把握することができた。

成果の公表については、『石組園生八重垣伝』『築山庭造伝(後編)』『秘本作庭伝』などにおける記述、『日本庭園史大系』に収録された全国300件以上の庭園の平面図に描かれた短冊石の位置、大きさ、方向、くいちがいの程度に関する分析結果、出雲地方の庭園の特徴に関する専門家の言説について、「日本庭園における短冊石の筏打ちについて」と題して、10月に日本造園学会関西支部大会で発表した。

2019年度は、庭園における短冊石などの切石の使用について、江戸時代の茶書と作庭書による情報収集および現地調査を続け、出雲地方の庭園のように地域的な特徴をもつ庭園に関する情報収集・現地調査をおこなった。現地調査は京都府・岡山県・鳥根県・愛媛県内の約20件の庭園を対象とした。その他、出雲地方の庭園の特徴について、鳥根県内の造園技術者への聞き取りをおこなった。

その結果、江戸時代の茶書にいくつかの事例がみられ、安土・桃山時代に古田織部が切石について説明した記録が『織部正殿聞書』にあること、また、桂離宮などに残る初期の事例の多くには古田織部の弟子である小堀遠州の関与が伝えられていることなどが明らかになった。さらに、文献に描かれた書院庭の切石は、前後の飛石とともに直線的に配置されるものが多く、露地とは異なる特徴が見出された。これは近代の出雲地方の庭園にもあてはまる。地域的な特徴もつ庭園については、愛媛県宇和島にも存在する可能性があり現地調査をおこなった。

成果の公表については、古田織部による説明の記述と、桂離宮、高台寺、南禅寺などの飛石の事例についてまとめ、「日本庭園の飛石における切石の利用について 古田織部・小堀遠州との関連から」と題して、10月に日本造園学会関西支部大会で発表した。

2020年度は前年度と同様に、庭園における短冊石などの切石の使用について、江戸時代の茶書、作庭書などによる情報収集および現地調査を続け、また、出雲地方の庭園のように地域的な特徴をもつ庭園に関する情報収集および現地調査をおこなった。現地調査は主として書院に面する庭園に着目し、岡山県・徳島県・大分県内の10件以上の歴史的な庭園を対象とした。その結果、大名庭園などにおける短冊石の事例に関する情報が得られた。また、出雲地方の庭園と『築山庭造伝(後編)』(1828年)などに描かれた庭園の図とを比較することにより、共通点や相違点が明らかとなり、全体の構成や要素の配置がとくに類似する事例があることがわかった。これらのことから、今後出雲地方の庭園の特徴を分析するにあたっては、近世の露地と、近代の豪農住宅においてみられる要素を軸として分類し、それぞれの傾向を整理することが有効な方法として見出された。

2021年度は、庭園における短冊石などの切石の使用について、江戸時代の茶書、作庭書などによる情報収集および現地調査を続け、また、出雲地方の庭園のように地域的な特徴をもつ庭園に関する情報収集および現地調査をおこなった。作庭書については、とくに明治時代から昭和時代初期の書籍の内容を調べ、先行する書籍からの引用等を分析した。現地調査は主として書院に面する庭園に着目し、島根県・兵庫県・大阪府・岐阜県内の歴史的な庭園を対象とし、それらの全体構成と飛石の詳細な情報を収集し、庭園の観賞・解説、周辺住民の参加などの公開活用の方法等を調査することができた。出雲地方の庭園の現代への継承については、造園技術者に聞き取りをおこない、また、移築保存された歴史的な庭園の比較をおこなって、継承の経緯の特徴を把握した。

新型コロナウイルスの感染対策防止のため一部の調査を延期し、また研究の進展により当初予定していなかった調査対象を追加するため、期間を延長することとした。

2022年度は前年度までの研究による成果や経験をもとにして、庭園における短冊石などの切石の使用について、江戸時代の絵図などによる情報収集、および類例となる住宅庭園の現地調査を続けた。作庭書については、前年度から引き続き、明治時代から昭和時代初期にかけて出版された書籍の文章および図版の内容を調べ、先行する書籍からの引用等を分析した。現地調査は主として書院座敷に面する庭園空間に着目し、兵庫県・和歌山県・香川県内の大規模な商家、大庄屋などの有力者の住宅につくられた庭園を対象とした。これらの調査においては、庭園の全体構成、およびとくに飛石とその周囲の関連する要素など、個々の構成要素の情報を収集した。また、現代への継承に関して、各庭園において、庭園の特徴の説明内容、周辺住民の参加などの公開活用の方法等について調査した。

2023年度は庭園の現地調査を継続して行い、これまでの成果について今後論文にまとめて公表するため、それらの整理をおこなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中島義晴	4. 巻 2019年度
2. 論文標題 日本庭園の飛石における切石の利用について 古田織部・小堀遠州との関連から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 2019年度 日本造園学会関西支部大会 研究・事例発表要旨集	6. 最初と最後の頁 9,10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島義晴	4. 巻 2018年度
2. 論文標題 日本庭園における短冊石の筏打ちについて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 2018年度 日本造園学会関西支部大会 研究・事例発表要旨集	6. 最初と最後の頁 3,4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------